
プレE X！　グノーシスな日々——。

テストメント

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プレEX！ グノーシスな日々――。

【Nコード】

N7591K

【作者名】

テストメント

【あらすじ】

StS、EXから五年前――。

まだ、神庭シオン達がグノーシスに居た頃のお話し。

グノーシス・メンバーに焦点を当てて語られる。笑いあり、シリアスあり、バトルありの短編集。

――始まります。

第一話、シオン編。「……そういや、こんな事もあったよな。俺も若かった……

——はい♪ ちょっとした思い付きで書き始めてしまいました（笑）

プレEX！ グノーシスの日々——。を、お送りします。

なお、これはテストメントが思い立った時に書くので、更新が超不定期と化します（笑）

どうか、その積もりでお願いします♪

ではでは♪ どうぞ〜♪

第一話、シオン編。「……そういや、こんな事もあったよな。俺も若かった……

「……大体やな。納得いかんのや、ワイは！」

そんな叫びが、荒野に響く。

とある、未分世界。

人口がかなり少なく、魔法が文化的に根付いて無い世界。
その世界で、関西弁の叫びが響く。

嘆息と共に、それを聞き流しながら少年は歩いた。

「こう言った事件はルシアの管轄ちゃうんかい！　なんでワイ達が
やらなアカンのや！」

「……その当人から押し付けられたからだよ」

いい加減、聞き流すのも限界だったか。

銀髪の少年が、再度の嘆息と共に答える。

そんな答えに、関西弁で叫んでいた少年。

眼鏡をかけ、セミロングの少年は目をくわっ！　と、見開いた。

「そやから言うてるんや！　こんな横暴を許してもいいんかい！？」
「……じゃあ、お前が抗議しろよ。僕は止めないから」

その台詞を聞くなり、ピタリと叫びを上げていた少年が硬直する。

暫くの間を置いて、ぽつりと呟いた。

「……骨の1、2本で済むやろか……？」

「運が良ければね」

その答えが如実に、少年達の立場の低さを示していた。

その少年達――。

神庭シオン。

本田ウィル。

その二人の少年の立場を。

少年は、二人共。十代前半の容姿であった。
歳は、少なくとも十五もいってないだろう。

そんな、少年達はまるで示し合わせたように嘆息し、がっくりと肩を落とした。

「逆らえば、地獄だ……」

「うう、なんて可哀相なワイ達……」

さめざめと泣きながら、しかし止まっている訳にも行かない。

とにかくにも、野宿は出来る限り避けたいので足を早める事にする。

飛行魔法を使って、村まで一直線と言うのも考えたが。

魔法が根付いていない世界で、下手な事をすれば後々が面倒であ

る。

黙って歩いているのも鬱なので、取り敢えず。姉に押し付けられた任務をシオンは確認の意味を含めて相棒に話しかける。

「え〜と、今回の任務は……。うちへと輸送されていた荷を奪った魔導強盗団から、荷を回収すること、か。……てか、遺跡からの遺失物なんて。なんで強奪されるような輸送方使ってたんだよ……」
「あ……。それな？　なんでも輸送関係者が、その遺失物を横領しようとして、強盗団に情報流したらしいで？　ま、アホな奴もおつたもんや」

遺失物……。つまりは、ロスト・ログアに区分されるべき物である。

そんな物を横領しても、グノース関係者か。はたまた、時空管理局あたりに目を付けられるだけだと言うのに。
確かにアホな奴も居たものである。

……まあ、グノースの人間なのだが。

その男とやらは、まあ地獄を味わい尽くした後に、何処かに幽閉されるかどうかされるだろう。

遺失物の横領とは、それだけ重罪なのだ。

「んで？　この強盗団が、この世界に逃げ込んでるんか？」
「らしいよ。全く、どうせならもっと遠くに逃げればいいのに、なんでこんな近場の世界を選ぶんだか……」

そうすれば、自分達にお鉢が回る事も無かつただらうに。

シオンは長々と嘆息しながら歩く、と――。

「漸く到着、か」

顔を見上げて、ぽつりと呟く。

その視線の先には、こじんまりとした村があった。

その村は、シオン達の世界。地球の文化レベルで言えば、西部開拓時代くらい文化レベルだった。

だが、確かグノーシスと影ながら繋がりがあった筈なので、見た目よりずっと文明レベルはある筈である。

そんな村を二人は歩く。

とにもかくにも、まずは宿の手配であった。

その強盗団とやらが、何処に居るのかも分からないのだ。

無闇に捜すよりは、ここらを拠点にした方がいい。

そう思いながら、宿らしき建物まで見つける。

取り敢えず中に入ろうとした。

瞬間！

「きゃっ!?!」

「……?……」

扉から人間が飛び出て来た。

赤毛の、少女。恐らくはシオン達より、2歳くらい年上か。

シオン達に飛び掛かるようにして、出て来る。

それを、シオンは反射的に抱き止める。

「つと。大丈夫？」

「……っ！」

シオンに抱き止められた少女は、一瞬だけ目を見開いてシオンを見る、と。直ぐさま睨み付けて来た。

……僕、なんかしたかなあ？

少女の、あんまりな眼光に思わずシオンはそう思う。

すると。

「へ！ だからよ。いくらだって聞いてんだろっが！」

そんな下卑た声が、シオン達に届いた。

何とは無しに、シオンとウィルは宿へと視線を巡らせる。

その扉に大柄な男が居た。

この男が少女を突き飛ばしたのか。手を前に突き出している。

よくよく見ると、男の後ろには六人程、別の男達も居る。

少女は、男の声を聞くなりこちらを突き飛ばして、そちらに向き直った。

「ふざけんじゃないよ！ 誰がアンタ達なんか……！」
「そう言っなって。可愛がってやるぜ？」

少女の叫びにも、男達は下品な笑いを浮かべる。
それに、シオン達は何となく両者の関係を理解した。

……同時に、凄まじく気分が悪くなったが。

男の台詞に、更に^{まなじり}眦を上げる少女に。

1番前に居た男がニタニタ笑いながら歩いて来た。
手を少女に伸ばす。

「ほれ、来いって！」
「嫌に決まってんだろ！」

掴まれる手を少女は、払い除けるが。それでも男は構わない。
更に手を伸ばして。

「……いい加減にしときや、オッサン達」
「ああ！？」

低い声がウィルから発せられた。
あからさまに嫌悪の感情を視線に乗せるウィルに、男達が凄みを効かせるが、ウィルは平然と逆に睨みつけた。

「ここまで言われてるんや。普通は引き下がるもんやで？ さっさと去ねや」

「んだと、このガキ——」

「——そうもいかないな」

ウィルと男達の言い合いに、突如。シオンの声が割り込む。
いきなり響いたその声に、え？ と周囲の目がこちらに集まる。
シオンは構わずに、するりと腰とポケットから”それ”を引きずり出した。

くしゃくしゃになった手配書と一本の、刀を。

同時に、着ていた黒づくめのコートを脱ぐ。

「ウィル。こいつらだ。例の強盗団」

「……マジか。偶然って、怖いなあ」

シオンの台詞に、漸く合点がいったのか。ウィルも頷いた。
こちらにも、コートを脱ぐ。

そんな二人に、まだ男達は固まっていた。

突然の状況に頭が追いついていないのだろう。

シオンは、苦笑して前へと出ると。

厳かに、宣戦を告げる——。

「我達、知識の蛇は^{グノーシス}。武装略奪行為に対して、ここに私刑を執行する——」

『——散れ!』

シオンの台詞を聞いて。漸く状況を把握したか、男達が散開しよ
うとする。

——絶望的なまでに、遅く。

取り敢えず、シオンは少女を人質にでも取るうしている男に半歩で詰め寄ると同時に、その動作で臍^{すね}を蹴り飛ばした。

- 撃 -

鈍い音が響く。

骨折でもしたのか、男が悲鳴を上げるが、シオンは当然構わない。足の痛みで頭が下がった男のコメカミに、尖った肘を打ちつける！

- 撃！ -

何かに亀裂が走るような音が響くと同時に、男は崩れ落ちた。

それに合わせるように、シオンは頭を下げる、と——。

- 射 -

- 閃 -

二条の閃きが、その頭上を通過。矢である。後方のウィルから放たれたのだ。

それは、デバイスを起動しようとしていた五人の男の内、二人の肩に突き刺さり。

- 雷！ -

小規模の電撃が、二人の身体に走る。

男達は、一瞬だけ痙攣すると。そのままんどりうって沈んだ。

――後、3人。

シオンは、すぐに前へと飛び出す。

いきなり半分も倒された事に動揺したか。

男達はシオンから慌てて距離を取ろうと、後ろに退がる。

――好都合だった。

宿は、一階部分は食堂か何かだったか。木の椅子とテーブルがあった。

シオンはそれを右手で掴むなり、後ろに下がる男にブン投げる！

- 撃！ -

相当な速度で飛んで行った椅子は、向かって右の男の頭に直撃。そのまま後ろにぶつ倒れた。

――残り二人。

シオンは、すぐに視線を巡らせると。

二人の男はデバイスを起動し終えた所だった。

何らかの魔法を、発動しようとするが。

あまりにも、遅い。

シオンは止まらずに、するりと前に駆けながらぱつりと呟く。

「――零落零無。発動」

刀を、抜く――！

- 斬！ -

一瞬の、交差。

既に、シオンは刀を鞘に納める所だった。

呟くようにして、告げる。

「壱ノ太刀。絶影」

直後、鈍く。何かが落ちる音が床に響く。

それは、デバイスを握った男達の手首より先だった。

同時に、斬られた部分から血が溢れるようにして吹き出す！

男達は、一時呆然としていたが。漸く何が起きたかを理解して奇声を上げた。

――取り敢えず喧しいので、シオンは椅子を拾い上げて。絶叫する男達の頭をブン殴り、昏倒させる。

床にぶつ倒れた男を見下ろして嘆息した。

「……デバイスなんて起動させなきゃ、こっちだって重傷を負わせたりしないんだよ」

そのままにして、出血死でもされたら目覚めも悪いので。懷から紐を取り出して止血してやる。

それが終わると、漸く息を吐いた。

「……あんな……。お前……」

そんなシオンに苦笑が響く。

入口から、ウィルが顔を見せている。

倒れた男を拘束魔法で縛り上げて、例の赤毛の少女と一緒にこちらを半目で呆れたように見ていた。

「たま〜に、思うんやけど。なんでこんだけの真似ができるのに、タカトさんや、ルシアに勝てんのやろうな？」

「……あんな、化け物姉兄達と一緒にするなよ。お前だってタカ兄いや、ルシアには勝てないだろ？」

「ワイは、殴り合いみたいな野蛮なことはお前に任せてんねん」

肩を竦めて言いながら、ウィルは宿の中に入って来た。苦笑するシオンを脇に、倒れている人数を数え始める。

「ひーふー……。一人足りんで、おい？」

「上の部屋じゃないか？」

シオンは答えて、目を細める。

その視線はこちらを睨む少女へと向けられた。

……敵意を剥き出しにして睨む少女に。

「あんたら、グノーシスの……！」

「？　なんで貴女がうちの事を？」

思わず、シオンは聞き返す。

グノーシスは、あくまでも表舞台に出る事が無い組織だ。少なくとも、一般市民に分かるような組織では無い。

なのに――。

呻くような少女の声に、ウィルが得意気に笑った。

「ま、そう言う事や。……仇討ちはワイらに任せときや」

「……おい、ウィル。どう言う事だよ？」

話しが見えないシオンが、ウィルに向き直りながら聞き返す。

それに、ウィルは肩を竦める。

「お前が止血しとる間に話を聞いとったんや。……例の荷を輸送

していた人間な？　彼女の父親やったんやと」

「それで……」

小声で呻きながら、シオンは嘆息する。

確か、強盗団に襲われた運び屋――。グノーシス所属の、専門の運び屋だ――。は、殺されていた筈である。

シオンは、漸くいろいろと腑に落ちる事を自覚した。
道理でグノーシスの事を知っている筈だ。

……ついでに、こちらを睨んでいる理由も同じく。

表情を険しくしているが。——仇討ち等と言う言葉なんて聞かなければ。

むしろ可愛い気があるようにしか映らなかったかもしれない。

少女は、拗ねるように口を尖らせると。

罰が悪そうに呟いた。

「当の仇に絡まれたのは、確かに間抜けだったけどさ——」

そう言った問題じゃあ無いような気がするんだけどな……？

そんな少女に、シオンは呆れたような瞳を向ける。

すると、ギロリとこちらを再び睨んで来た。

「大体、アンタ達！ 来るのが遅いんだよ！ そりゃあ私だって自分の仇は自分で取りたいなんて融通の利かない事は言わないよ！ でも、それならなんで、ここまで来るのに三日もかかってるのさ！ こいつ達がとんずらこいてたらどうするつもりだったんだよ！？」
「——言い訳する積もりは無いよ。何言ったって聞かないだろうし。……それに、奪われた荷が荷だし」

人が少ないとは言え、ここはちゃんと、国があり、文明がある世界である。

そんな世界に介入するには、面倒な手続きがいる。
それに、奪われた荷は——。

シオンは、激昂する少女を^{なだ}宿める積もりで話す。
そうしながら、彼女の父親だった運び屋の名前を思い出していた。
確か、出て来る前に確認した資料では。リコ・サンドと言う名前
だったか。

その縁戚、つまり少女の名前は――。

「でも、一応。貴女には話して置いた方がいいんだろ？ 全部が
終わった後にでも。――ジニー・サンドさん」

そう、少女の名前を呼び。シオンは再び上を、見上げた。

あと一人、強奪された荷と共に居る筈の人間を――。

だが、シオンは知らなかった。

この事件が自分が思っている以上に長引く事を。

……この3人で、ちょっとした旅になることを。

シオンは知らなかった――。

（中編に続く）

第一話、シオン編。「……そういや、こんな事もあったよな。俺も若かった……」

はい、短編集の筈なのに。いきなり前編です（汗）

むう（汗）ちゃんと、短編集になるのか……。

が、頑張ります！

ではでは、また次回……」

第一話、シオン編。「……そういや、こんな事もあったよな。俺も若かった……」

はい♪

プレEX。第1話（中編）です♪

何気に三部構成ですが（汗）

気にしない方向で行っていただけるとテストメント的にはありがたいです（笑）

ではでは♪ どうぞ〜♪

第一話、シオン編。「……そういや、こんな事もあったよな。俺も若かった……」

シオンは、少女。

ジニー・サンドを射るように見つめながら、きつぱりと言い放つと。

彼女から視線を外して上の階を見上げる——、と。

「あ、あの～～」

「？」

全然別の方向から響いた戸惑いの声に疑問符付きで振り向く。

そこには、老人が立っていた。

この宿の亭主らしい。

ひどく困り果てた表情でこちらを見ている。

シオンと、ウィルはその即座に老人の表情の理由を悟った。

「ああ、先に言って置くべきでした。おじさん。現時点を持って、超司法権限により、一時的にこの宿を徴収します」

「は、はあ」

「壊れたものや、宿については後でここに連絡して頂ければ。後日賠償請求できますから、了承して下さい」

「水増し請求して。一から宿立て直せるで、じいちゃん」

シオンの台詞を茶目つ気たつぷりにウィルがウィンクして引き継ぐ。

そんな彼等にジニーは呆れたような声を上げた。

「……そんな事も出来るのかい？ アンタら……」
「と、言うより。そんな事も出来ないようじゃあ別世界で堂々と戦闘行為なんて出来ないよ」

その為に、わざわざ時間を掛けて超司法権限なんてものをグノースは引つ張って来るのである。

そうでなければ、世界間戦争なんて事にも成り兼ね無い。

肩を竦めて、今度こそはシオンは上の階を目指す。

ウィルも、弓型のアームド・デバイスを構えながら着いて来て――
――。

「……念の為に言うけど、お姉さんはそこに居てね」

背後で、ギクリとした気配がシオンに伝わる。

案の定、ジニーは二人に着いて来ようとしていた。

シオンの台詞に、少しだけ戸惑いながら。

それでもジニーは反対して来た。

「なんでだい！ あたしが着いて来ちゃあ、なんかマズイっての――」

「――死ぬよ」

遮るかのように放たれた言葉に、ジニーの叫びが止まる。

ついでに、着いて来ようとしたその足も。

シオンは振り向く事も、それ以上言葉を掛ける事もせずに上の階へと階段を登って行った。

そして、二階に着く。

そこには、三つ程の部屋があった。

小さい宿なので、部屋数はこんなものだろう。

シオンは、そう思いながら最初の部屋を開こうとして――。

ぞくりと言う気配が、背中を突き抜ける！

同時に、ウィルの叫びが背中を叩いた。

「シオン！ 中や無い！ 廊下や！」

「―― 撃ち抜け、轟雷」

【サンダー・インパクト】

シオンの横手から光が膨れ上がる！

それを視認する事を即座に諦めて。シオンは部屋に体当たりし、その中へと突っ込んだ。

- 轟 -

直後に、特大の雷が廊下を埋め尽くす。

シオンは部屋に入る事で、避ける事が出来たが、後ろに居た相棒はそうもいかない。

シオンは、ウィルへと叫ぼうとして。

「させるかい！」

叫びと共に、カートリッジが二つ排出された男が響く。

ウィルが弓型のアームドデバイスのカートリッジをロードしたのだ。

そして、向かい来る雷砲へとウィルは弓を構え。

「ヘイルストーム！ 撃ち抜けやあつー！」

- 轟！ -

高らかに叫びを上げて、顕現した矢を撃ち放つ！
その矢は、炎を圧縮して作られたものだった。

ウィルの、希少技能。

バレット・エレメンタル。

その効果故である。

この能力は、あらゆる属性を付与した弾丸を作る技能であり、それは例えば炎や雷等の自然物に始まり、魔剣殺し、や吸血鬼封じ、のような概念を付与する事が可能な技能である。

故に、その名が与えられたのだ。

そして、威力を求めるならば自然物概念を弾丸（矢）として放つのが一番効果的であった。

つまり――。

- 撃！ -

- 裂! -

雷砲と炎矢が真つ正面から衝突し、何と拮抗する！
その余波は、たやすく宿を傾けさせ始めた。

二つの威力に、場が耐えられ無いのだ。

シオンはそれに気付くなり、ぞっとする。

ウィルの一撃は、少なく見積もってもA A A相当の威力があつた筈だ。

それと拮抗していると言う事は、つまり同じだけの威力があると
言う事である。

片方だけでも、このこじんまりとした村を消し飛ばすには十分な
破壊力なのに。

それが、互いに炸裂した日には――。

冗談じゃ無い……！

「シオン！」

「分かつてる！」

ウィルからの叫びに、シオンは頷くなり刀を抜く。
そうして、吹き飛んだ扉の横に向かって刀を振り上げた。

「零落零無、発動」

咄くと同時に、シオンの身体を魔力が渦巻く。

それを、迷い無くシオンは解き放った。

「神覇、式ノ太刀！ 剣牙ア！」

- 閃！ -

叫びと共に、振り落とされた刀から放出されるは、魔力斬撃！
これは、魔力で形勢された刀を飛ばす技である。
この場合はつまり、目の前の壁と――。

その直線上にある、雷砲！

- 斬！ -

そして、シオンが放った剣牙は目的通りにそれを斬り裂いた。

零落零無を発動した状態の剣牙が！

擬似虚数魔力により、術式を叩き斬られた雷砲は抗う事も許されず、わずかな残滓を残して消える。

後に残されたのは、雷砲とぶつかり合っていた炎矢！

障害物が無くなった炎矢は真っ直ぐに廊下を突き進み――。

- 爆！ -

直後、凄まじい爆音と衝撃が二人の身体を突き抜けた。

炎矢が炸裂して、真っ正面にその威力を貫通させたのである。
二人の身体を襲ったのは、ただの余波だった。

「っ——！ 奴は！？」

余波で棒立ちになっていたシオンだが慌てて廊下に出る。そして、自分を襲った雷砲を放った術者を見ようとして。しかし、それは叶わなかった。

何故ならば、シオンが見る先には何も無くなっていたから。

そこから先には、村の風景と空だけが覗いている。

恐らくは、炎矢の一撃で二階部分が消し飛んだのだろう。

この威力ならば、打倒しているのは間違い無い。

だが——。

「悪い……。逃げられたわ」

後ろから荒い息で声が来た。

ウィルである。シオンは彼に振り向くと、珍しく神妙な様子でウィルは頭を垂れる。

「空間転移——。あれは、間違い無く空間転移やな。やられたわ……」

「……そっか」

ウィルの言葉に、シオンは頷く。

多分、シオンが雷砲を斬り裂いた時点で逃げを打ったのだろう。

どちらにせよ、永唱も準備も無く空間転移出来ると言うのは、それだけで驚異である。

強盗団の一人が、それほどの使い手だったか。

あるいは――。

……アレが、発動したか。

どちらにしても、逃げられた以上。既に確かめる事も出来なかった。

ウィルも疲弊しきっている。

自分も、だが。

追い掛けたい所だが、もう余力も無い。

シオンは、へたれ込むウィルと同時にため息を吐く。

「……どのみち、下の奴達を連れて行くのが先だね」

「……そうなるなあ。でも、これで……」

言つと、二人は風が吹き抜けて来る二階部分に視線を巡らせる。

そこから消えた筈の、アレを思い出しながら。

ウィルは続きを放った。

「最悪の事態になってもうたな」

「……そうだね」

シオンが呻くように同意する。

ふと気付き振り返ると、階段の陰からこっそりと、ジニーがこち

らを伺っているのが見えた……。

ぱちつ、と炎の中で木片が爆^はぜる。

それを澄ました顔で避けながら、シオンは手の中のビンのような物を弄んだ。

夜の森の中、虫の声が遠くから聞こえる。

そんな中を、シオンとウィルは地面に座つて、焚火^{たきび}を囲みながら、じつと夜風に包まれていた。

火の中には棒に突き刺した干し肉と、飯盒^{はたけい}。そして、蓋を開けられたコンビーフの缶詰が入れられている。

今日の晩飯である。

それらを見遣りながら、ウィルが呟いた。

「丸一日、立つてもうたな……」

そんなウィルの声に、シオンも嘆息する。

二人が倒した強盗団を、グノーシス本部に連行している内に、それだけの時間が掛かってしまったのだ。

それが終わるなり、二人は目撃情報や、ばら撒いたサーチャーを頼りに、先日。雷砲をぶつ放した強盗団最後の一人と思われる男を追っていたのだが。

未だ、完全に捕捉出来ない状態で。こうやって野宿する羽目になったと言っ訳だ。

シオンはため息を吐きながら、ウィルへと視線を移す。

「まあ、こちら辺に人里が無かったのが唯一の救いだよ。……アレが発動してるなら、ね……」

「……あんな、シオン。もう分かっ取るやろ？」

シオンの返答に、ウィルは眉を潜める。

それに、シオンは嘆息した。

分かっている。連行した強盗団の個人情報ば、さつき見たばかりだ。

大多数の人数を捕まえた後に、そんなものを寄越された訳だが。その内、逃げたと思われ強盗団最後の一人の情報だが――。

どう見ても、空間転移なんて使える程の魔導士では無かった。ウィルとの撃ち合いで拮抗出来得る筈も当然無い。

つまり、は――。

「……」喰われた”って事が……」

「そう、なるんやろうなあ。……まあ、上手くいくんなら、あのままどっかで力尽きてるっちゅう事も有り得るしな……」

呻くようなシオンの台詞に、ウィルは答えるものの。その声には、どこか力が無い。

恐らくは、自分があれを逃がしてしまった事を気に病んでいるの
だろうが――。

どちらにせよ、今言っても詮無い事である。

シオンは長々と、もう一度ため息を吐くと。

今度は焚火の明かりの外。

暗がりには佇んでいる、人影へと視線を移す。

わざとこちらから離れるようにして、木の陰に座っているのは宿
で会った仇討ちを志す少女、ジニーだった。

あれから、ずっと着いて来たのである。

「……せめて明かりの中に居なよ。野犬に襲われるよ?」

シオンは、今夜何回目となる警告をジニーに告げる。

だが、やはり彼女は聞くつもりは無いらしく。反応もしない。

ウィルが、もう諦めるとばかりに頭を振った。

だがシオンは続ける。

「……できれば、もう帰った方がいいんだ。強盗団の殆どは捕まえ
たし、仇討ちは――」

「最後の一人が残ってるだろ?」

こんな時だけ、間髪入れずに答えて来る。

そんな返答に息を詰まらせるシオンに、ジニーはじろりと視線を
向けた。

「……なのに、なんであたしを追い返そうとするんだい？」

「——仇討ちなんて、馬鹿らしいから止める。なんて事は言わないよ。……でも、危険なんだ」

「あたしに言えない何かが、あるって事だろう？」

その言葉に、ついにシオンは沈黙した。

やがて、ため息を吐くと別の事を言う事にする。

「せめて、なんか食べた方がいいよ。食料なら余分に持って来てるから——」

「ごまかすなよ！」

怒鳴り声が、シオンの声を掻き消す。

ジニーは立ち上がると、シオンの傍まで詰め寄った。
焚火の炎が、下から彼女の顔を照らす。

その顔は、傍目からも怒りと不信感に染まっていた。

「いい加減にしなよ……！ アンタ達が何かを隠している事は分か
つてるんだ！ 全部話せよ！」

「……僕は、全部終わってから話すと言った筈だけど……」
「待てる筈が無いだろ……！」

ジニーは真剣な顔で、シオンを見つめる。
十秒か、あるいはもっとか——。

やがて、シオンはため息をもう一つ吐くとジニーに向き直った。

「分かったよ」

「……シオン？」

シオンの答えに、ウィルから静かに警告の声が発せられる。

——今回の事件は、遺失物絡みの事件だ。

つまりは、元来は機密に関わる事件。

それを話すのは——。

だが、シオンはウィルに頭を振ると再びジニーへと目を移した。

「……何聞いても後悔しないね？」

「……それが、親父の事ならね」

あくまでジニーはシオンから視線を外さない。

シオンは頷くと、話しを始めた——。

（後編に続く）

第一話、シオン編。「……そういや、こんな事もあったよな。俺も若かった……」

はい、中編終了です♪

次は後編かな？

その前にStS、EX本編を更新したいと思います（笑）

それと。この短編集ですが、個別に主人公を変える予定です。

なんで、次は誰を主役にした話しが読みたいかリクエストを貰え
ると出来るだけお答えします♪

ではでは♪ よろしくお願いします♪

ではでは〜♪

第一話、シオン編。『……そういや、こんな事もあったよな。俺も若かった……』

……ど、ども！

テストメントです♪

ええ、すみませんでした（汗）

に、二ヶ月ぶりの投稿に自分でもびっくりさ！（汗）
しかも後編分けてるし（汗）

いやー。StS、EX本編を優先してたらえらい長い期間放置を
（汗）

こ、今度からは気をつけます（汗）
では、後編1。どぞー♪

第一話、シオン編。」「……そういや、こんな事もあったよな。俺も若かった……

「……何聞いても後悔しないね？」

「……それが、親父の事ならね」

二人はたき火の中で、まるで挑み合うかのような視線を交わす。
視界の端で、ウィルが肩を竦めたのが見えた。

——それは、そうだろう。

遺族に、事情を”完全に”説明するような真似、普通はしない。

しかし、シオンは構わなかった。

話しを始める――。

「……君のお父さんを殺したのは多分、強盗団の人間じゃない」

「……なんだって？」

「いや、そもそも逃げた強盗団の一人も”喰われた”んだから仇も何も無いんだけどね」

思わず怪訝そうに声を上げる。

そんな少女、ジニーの声を、シオンは無視した。

手に持ったビンらしきものを弄ぶ。

「指定遺失物『カニバリズム・ワーム』」

「かに……？」

「通称、『人喰い虫』。……まあ、昆虫どころかそもそも生物じゃ

ないんだけどね」

人喰い虫。

そんないかにもな名前をなんで付けたか。

多分、この虫の特徴からそのまま名付けたのだろう。

なんとなく、シオンはそう思う。

見るとジニーの顔色は青くなっていた。

それでも、シオンは続ける。

何故なら彼女が望んだのだから。

「この虫。古代のロボット兵器らしいんだけどね。その名の通りの特徴を持つてる」

「それって、まさか——」

「食べちゃうんだよ。」人を”。しかも、食べるだけじゃない。食べた人間を取り込んで、新しい肉体を形勢するんだ。”食べた人間そっくりだね”」

この虫は、食べた人間の知識や魔法。

さらに食べた人間が魔法使いならば、リンカー・コアすら食べて己のモノにしてしまう。

つまり、魔法が使えるのだ。

それだけでは無い。分子レベルで自らを組み立て変える事によって、遺伝子すらもそっくりそのまま同じにしてしまうのである。

その性質から、古代アルハザード時代からの”暗殺兵器”とグノ―シスは断定したのであった。

考えてみるまでも無く、非人道的極まる兵器なのだが。そんなものは世の中には溢れている。

地球にだって、B兵器に区分される『人喰いウィルス』なんてのもあるのだから。

人間、追い詰められればどこまでも非道になれる。
世の常であつた。

——犠牲者からしてみればいい迷惑だろうが。

「……僕が持っているこのビンだけど。これ、封印用の魔法が掛けられていてね。『カニバリズム・ワーム』をこの中に封印してただけど——」

言いながら、シオンは底を上げてジニーに見せる。

——それを見て、ジニーは絶句した。

割れていたのだ。底が。

恐らく強盗団の襲撃で割れたに違いない。

シオンは一つだけ頷くとビンを仕舞った。

「『カニバリズム・ワーム』は、その特性上。食べた人間を消化して、行動エネルギーを得ているんだ。……2、3日もすれば食べた人間を消化し尽くして動けなくなる。——虫自体は動きも鈍いから大した脅威にならないしね」

だが、それがもし人里にあるならば大変な事になる。

おそらく『人喰い虫』は節操無く人を喰らいまくるだろう。

ジニーには説明しなかったが、この虫を捕獲する際に十数名の犠

犠牲者が出ている。

全員食べられたのだ、虫に。

しかも、喰らった魔導士の魔法を使用して暴れ回ったと言っただから手に負えない。

——今回、人里から虫を探して回ったのはそう言った理由もあった訳である。

全てを話し終えて、シオンはジニーを見遣る。

彼女は細かく震えていた。

——ひよっとしたら、自分も虫の胃袋の中に居たかもしれない事を漸く自覚したか。

いや、それ以前に父親が虫に喰われた事がショックだったのかも知れない。

だが、ジニーは唇を噛み締めるとシオンをキッと睨みつけた。

「なんで……！　なんで、そんな危ないものを後生大事に取ってたんだよ！　封印なんてしないで壊せば良かったろ！？」

「言いたい事は分かるよ。弁明もしない。——けどね」

確かにその通りであろう。

核兵器と同じである。そんな危ないもの、さっさと棄ててしまえ。とても正しい意見である。

だが——。

「そういった危険なものを全て棄ててしまったりしたら——。人間

の文明なんてものは、何一つ残ったりはしないんだよ」

夜の闇は嫌いじゃない。

シオンは焚火を消した暗い中で、そう思う。

昔はこの夜が大嫌いだった。

いや、怖がっていたと言っても過言じゃない。

だが、”彼女”のおかげで夜は嫌いでは無くなった。

——いや、異母兄達や母のスパルタ教育の賜物と言えなくも無いのだが。

思い出して面白いものでも無い。

そう思いながら、一人見張りを続ける。

ちなみに、ウィルは仮眠中である。

交代で見張りをしているのだ。

そうでなくては、いきなり野犬や下手をすれば熊に襲われかね無い。

あくまで、ここは全く見知らぬ土地で違う世界なのだから。

そして——。

「——僕に何か用？」

「……っ!？」

背後で驚いた気配がする。

シオンはため息を吐くと振り向いた。

——そこには案の定、彼女、ジニーが居た。

彼女は驚きに目を見張った後、ゆっくりと近づくとシオンの隣に座り込んだ。

「……いつから気付いてたのさ」

「お姉さんが、寝袋で寝たフリをしていた頃からだよ」

つまりは最初も最初。起き上がる前から分かっていたのである。

ジニーはそれに顔をしかめた。

「……寝たフリをしてた訳じゃないさ」

「眠れない？」

「あんな話を聞いた後で、どう眠れってのさ？」

それはそうかもしれない。

女の子相手にちょっと配慮が足りない過ぎたか。

シオンは少しだけ反省した。

「アンタさ……」

「ん？」

暫くすると、ジニーから話を振って来る。

それに疑問符を浮かべると、ジニーは一瞬だけたじろいだ。

が、そのまま続ける。

「相棒とはやけに違うね。随分あたしに突っ掛かって来るけど、な
んでだい？」

「突っ掛かる？ 僕が？」

意外そうな顔をして、シオンは彼女との会話を思い出す。

……言われてみれば、確かにきつい言動が多かった気がする。
言われるまで気付かなかったが。

自分でなんでだろうと考えて――。
すぐに、答えは出た。

非常に面白く無い答えが。

いきなりムスツとしたシオンに、ジニーは少し驚く。

「……どうしたのさ？ いきなり不機嫌になって？」
「べつに……」

とは言つものの表情に出てしまったかもしれない。
ジニーがうるたえるのを見て、シオンはため息を吐いた。

「……多分、お姉さんがうらやましかったんだ。お姉さんがお父さ
んの事、大事にしてたみたいだから」

「……え？」

「僕、父さんいないから」

答えながら、シオンは相棒。

仮眠しているウィルに目を向けた。

よく考えれば、ウィルは自分を制止してくれてたような気がする。

——彼の方が、よっぽどジニーに対して思う事はあったろうに。

ウィルは孤児である。

両親を早くに亡くしてしまい、以降は幼なじみである御剣カスミの家で暮らしている。

どうも、親同士が親友だったとか。

元々は家族ぐるみの仲だったので、ウィルが天涯孤独となった時に御剣家で引き取ったとシオンは聞いていた。

その彼に比べれば、自分はまだまだ子供だなと思う。感情が上手く制御出来ていない。

そんな風にぼんやりと思うシオンに、ジニーはバツの悪そうな顔を向けた。

「……ごめん」

「別に謝られるような事じゃないんじゃないかな？」

言ってしまったえば、シオンがした行為は八つ当たりに近い。謝る必要があるのはむしろこちらであろう。

それでも、ジニーは謝った。

「……ううん。知らなかったとはいえ無神経だったよ。ごめん」

「別にいいってば。……それより——。良かったら聞かせてくれる？ その、お姉さんのお父さんの事」

「あたしのかい？」

思っても見なかったのだろう。
そんな風に言われるのは。

ジニーは驚いたような顔から一転はにかんだような笑顔を浮かべた。

……初めて見るな、お姉さんの笑顔……。

シオンはそう思いながら、しかし指摘しなかった。
ジニーは苦笑して、話し始める。

「そうだね……。一言で言うと、頑固親父」

「頑固？」

「ああ。もう、頭が固いつたらありやしない。昔っからそうでね。

——あたしが、ハイスクールに通わないで働くって言った時も大喧嘩したもんさ」

どこことなく、懐かし気にジニーは話す。

それに、シオンは頷きながらやっぱり羨望を抱いている自分を自覚した。

話しは続く。

「……あたしね。学校通わずに働きたかったんだ。多分、早く一人立ちしたかったんだと思う。親父にそれを話したらもう激怒してね。近所迷惑なんて考えずに、大喧嘩さ。……一晩喧嘩して。そして、あたしは、家を出た」

「……お姉さん？」

思わず、シオンはジニーに振り向いて――。

——絶句した。

ジニーの瞳から零れ落ちる雫を見たから。
彼女は笑いながら泣いていた。

黙り込んだシオンに構わず、ジニーは続ける。

「家出してさ。その後はずっと友達とかを頼って仕事してた。……
すごい苦勞もしたけど、定職にもつけて漸く一人前になってさ……。
久しぶりに親父に会うつもりだったんだ。『どうだ、あたしだって
やれば出来るんだ』って言ってやる積もりだったんだ！ あの日！
親父が仕事終わったら！」

とめどなく涙が溢れる。

ジニーの声はついには叫び声になっていた。

でも、シオンは何故かそれを止める事が出来なくて。

ジニーは嗚咽を上げながら、叫び続ける。

「やっと……！ やつとだぞ！？ やつと、親父に素直に向き直れ
るところだったんだ！ ごめんねって言えるところだったんだ！ な
の、なんで……。そんな、時に……！」

後悔とは先に立たないから後悔と言う。

そんな当たり前の事をシオンはジニーの叫びに思い知らされた。

ひよつとしたら、自分もこんな風に泣く事もあるかも知れない。

そんな風に思いながら、ジニーの為にしてやれる事は何かないか
……。

一つしか思いつかなかった。

彼女の頭を引き寄せ、抱きしめてやる。

……僕は、何も言えないし。何もしてあげられない。
でも、胸を貸すぐらいなら出来る。

逆に言えばそれくらいしか出来ない自分をシオンは呪いながらジニーを抱きしめた。

彼女はシオンの胸にしがみつくと、そのまま泣き続ける。

「こんな理不尽……！　ないじゃんか！　こんなの、許せないじゃないか……！　あたしは……！　あたしは！　もっと親父と……！」

後は言葉にならない。

ただ、涙と共に叫びだけが響いて。

二人は暫く、そのまま抱きしめ合う事となった。

「……あー。その、ごめんな……？」
「ん、いや、まあ」

一時間後、漸く泣き止んだジニーが顔を赤らめて告げる言葉に、シオンもらしくなく。ばつが悪そうに答える。

年下の男の子に抱き着いて泣いたのが恥ずかしいのだろう。

顔を背けているジニーにシオンは微笑した。

「……でも良かったよ。泣けたようで」
「？　なんでだい？」

いきなりのシオンの台詞にジニーが思わず疑問符を上げる。
それに微笑を苦笑に変えて、シオンは夜空を見上げた。
何の光も無いこちらでは星空が綺麗に映る。

シオンは懐かしさを覚えながら、ジニーの問いに答えた。

「『痛い時は痛いって言わないと。泣きたい時は泣かないと、傷になる』」
「？」

「タカ兄い、……僕の兄さんんだけどね。その人に、そう言われた事があるんだ」

いつだろう、そう言われた時は。
そんなに古い話では無いのに、随分と昔な話しな気がする。

その言葉の意味はシオンには分からない。

だが、その言葉には何かとても大切なものが秘められていた。

それだけは理解した。

だから。

「……お姉さんも、無理しないで泣けてよかったなって。そう、思うんだよ」

そう言って、シオンは笑う。

それにジニーは一瞬だけ呆然として。
やがて、ぷいっと顔を背けた。

見れば、耳が赤くなってる。

それに気付いたシオンはくすくすと笑った。

背けた向こう側で、ジニーが無然としているのが手に取るように分かる。

「……年下のくせに、生意気だ」

「まあ、ね。こんな事してるから、しょっちゅうそう言われるよ」

そう言って笑う。

暫くそうやって夜空を見上げていると、不意にジニーが立ち上がった。

そのままでシオンに告げる。

「もう、眠くなったから。寝る」

「うん。それがいいよ。……おやすみ」

ジニーにそう言うと、シオンは再び夜空を見上げた。
こうやっていても周囲には気を配っている。

……だからだろう。

そんな声が聞こえたのは。

寝袋に潜り込む前に、その言葉は小さく。

本当に、小さく響いた。

「……………ありがとう」

思わず振り返る。

その時には、既にジニーは寝袋の中だった。

再び苦笑する。

彼女は親父さんの事を頑固と言ったが、
案外似た者同士なのでは無いか。

……素直じゃないなあ。

そう思いながら、告げる。
返しの言葉を。

「どー、いたしまして」

月はまだまだ高い。

夜明けにはまだ遠そうだった。

（後編 2 に続く）

第一話、シオン編。「……そういや、こんな事もあったよな。俺も若かった……」

はい♪ 後編1終了です♪

シオン……。この歳からそれか？

と、言うツツコミが聞こえます（笑）

ええ、だってトウヤやタカトの弟だもの！（笑）

こうなるさ！（笑）

次はStS、EXを書きます故、後編2は暫くお待ちを（汗）

ではでは〜♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7591k/>

プレEX！ グノーシスな日々――。

2010年10月13日13時09分発行